

第3回郷土史調査研究発表会

茨城偕行会事務局長

佐々木克徳（陸自71）

平成30年1月19日（金）茨城偕行会は、第3回目の郷土史調査研究発表会を、陸上自衛隊勝田駐屯地で実施した。

同駐屯地は、施設科隊員の教育訓練を主要任務とする施設学校や、教育支援を担任する施設教導隊等が所在し、昭和26年に旧日立精機工場跡地に創設され、平成23年には開設60周年を迎えている。

今回の発表会は、駐屯地の絶大な支援協力を得て、前段は施設学校教場で駐屯地修親会員と共に郷土史等の調査研究成果を聴講し、後段は施設教導隊の保有する各種装備品の展示説明と駐屯地防衛館の研修を行った。

参加者は、原善昭会長（陸自57）以下、19名であったが、装備品展示等に、増田忠則氏（陸自59期）が副会長を務める。つくば市自衛隊協力会「から、約20名の参加があり、自衛隊への理解を深めるよい機会となった。

発表会が、駐屯地修親会の部外講師講話として設定されたため、施設学校校長兼駐屯地司令腰塚浩貴陸将補（陸自88）、駐屯地修親会各支部長をはじめとする約150名の修親会員や、最先任上級曹長等の聴講があり満員の盛況であった。10時、司会者の施設教導隊水際障害中

隊の村木宏彰3等陸尉より、講師の紹介等が行われ、発表会は開始された。

前段第1部は、金澤孝一副会長（陸自58期）による「武士の登場と戦いの変遷」を拝聴する。奈良時代以降における武士の登場と時代に応ずる戦い方（戦術、戦闘法）の変遷が、関東地方を中心に紹介された。特に常陸平氏が「将門の乱」後中央へ進出し伊勢平氏（平清盛）として勃興する一方、地元に残留した平氏のたどった道。また武田信玄に繋がる甲斐源氏の祖が、学校近傍の武田荘に所在したことや、伊達政宗の祖が筑西市伊佐荘に所在し、阿見町、龍ヶ崎等が伊達藩（仙台）の飛び地であったなど、地元に関係する興味深い話を拝聴した。

講師から、「最近、茨城県の魅力度が低いと言われるが、桓武天皇当時「親王任国」（常陸、上総、上野）の一つであり極めて魅力的な土地であった。」と締め言葉があった。

前段第2部は、山根峯治副会長（陸自70期）による「風船爆弾（ふ号兵器）について」の調査成果を拝聴する。

風船爆弾は、終戦間近の19年から20年にかけて、気球聯隊によって実施された戦略爆撃作戦であるが、作戦の性格上あまり知られていない。

この作戦が、終戦時の態勢等を確立させるため実施されたことや、連隊本部・主力が茨城県大津（五浦海岸近傍）に所

在、風船作成に地元の西ノ内和紙を使用。また風船爆弾を運んだジェット気流の発見者が、つくば市の高層気象台長大石博士であることなど、茨城に関連する多くの興味ある話を拝聴した。

1万個弱放流、4000個弱の米国到着が米軍資料で確認されている。「日本側からの爆撃効果確認は？」の質問に、八木アンテナ発明の八木博士はじめ多くの技術者の協力を得て、4カ所の電探所を開設、風船の飛行を追跡していた話や、参謀本部から天皇陛下へ成果が報告されていたとの貴重な話が紹介された。

「北茨城市の野口雨情記念館に多くの貴重な史料があるので、機会があれば訪ねて欲しい。」との言葉があった。



後段の装備品展示は、13時開始、施設教導隊第3科防衛幹部の奥本幸治2等陸尉から全般説明後、それぞれの装備品毎に担当者から説明を受けた。

今回は、94式水際地雷敷設置、92式浮橋、96式装輪装甲車、91式戦車橋の4種類が展示されたが、平素なかなか目にするのではない装備品であり、担当者に色々な質問がなされた。

駐屯地防衛館では、担当の中澤泰治事務官より、建物が施設施工に関する集合教育の場を活用して建設されたことや、展示品には、ペリリユー1島守備隊として敢闘した陸軍歩兵第2聯隊をはじめ、郷土部隊に関する多くの資料があることなどが紹介された。

14時、すべての研修を無事終了、参加者一同再会を約して、駐屯地を後にした。前記以外の参加者は、以下のとおり。

根本忠氏（仙幼47）、福井正躬（陸自60期）、水越美知（陸自61）、大高哲男（陸自66）、飛田裕（陸自67）、太田保重氏（陸自71）、中久喜勉（陸自72）、坂本憲昭（陸自75）、鈴木義長（陸自76）、坪沼浩（陸自01）、荻沼蔵次（陸自准尉）、大川豊（陸自事務官）、齋藤勝彦（陸自事務官）、岡野安次（陸自家族）、小川直也（一般賛助）、